

金環蝕

石川達三

金環蝕

石川達三

新潮社版



金環蝕

昭和四十一年十月十五日 発行
昭和四十二年二月二十五日 九刷

定価 四〇〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(20)一一一番(大代)
振替東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・光邦印刷株式会社 製本 新宿加藤製本所

© 1966 Tatsuzo Ishikawa. Printed in Japan.

長編
小說
金環蝕・目次

首相夫人の名刺	一〇三
退職勧告	一〇九
大臣の三段論法	一一六
総裁更迭	一二三
特別作業班	一二八
ローア・リミット	一三三
驚くべき暴挙	一四一
総理病に倒る	一四七
怪物と正直者	一五三
一人の犠牲者	一六〇
彼の死をめぐって	一六六
政変	一七三
政治圧力	一七八
身辺の不安	一八五
脅迫と誤算	一九一

悪人と悪人

説得効を奏せず

質問第一日

孤独な闘士

空虚な質疑応答

財部の証言拒否

事件の核心に迫る

石原参吉の逮捕

二つの事件

予想通りの解決

庶民は何も知らない

一九八

二〇四

二一〇

二一六

二三三

三三九

三三五

三四三

三四八

三四四

三六一

金^{きん}

環^{かん}

蝕^{しよく}

まわりは金色の栄光に輝いて見えるが、中の方は真黒に腐っている。

一枚の名刺

東京麴町の永田町にある総理大臣官邸は、迷宮のような建物である。数百人を容れる大広間があるかと思うと、すれ違うことも出来ないような狭くて暗い階段もある。一度この石造りの建物の中にはいったが最後、馴れない者には方角も何も解らなくなり、独りだけでは帰る道も見つからない。行き止りになったせまい廊下の奥に宮殿のような華麗な部屋があったり、陥し穴にも似た急な階段のかげに、牢獄のように暗い小部屋があったりする。あるいはこの建物そのものが、日本の政治の象徴であるかも知れない。この建物のなかでは二回にわたって、殺人事件があった。五・一五事件と二・二六事件である。国家の榮譽を一身に集めた政府の首班はまた、一部の民衆の怒りと怨みとを受ける不幸な人でもあったのだ。この建物が一種の迷宮であるように、一国の政治もまた或種の迷宮であった。ここで、何が行なわれ、何が計画され、何が取引きされて居るかは、人民のほとんど誰も知らされてはいない。首相官邸

そのものは国家の榮譽の象徴であるが、官邸の内部で何が行なわれて居るかという事は、誰にも解らない。まるで暗黒街のように、何もかもが極秘であった。

この官邸の中には秘書官の事務室だけでも三つか四つ有るらしい。高級秘書官から、雑務整理係のような秘書官まで、人数も二十人以上であった。西尾秘書官というのはその中でも格の低い、三十五歳の、神経質な男である。五月末の或る日、彼は誰にも言わないで部屋を出た。秘書官の仕事はたいていみな極秘だった。お互いの間にも秘密がある。甲がどこへ行つて来たか、乙が誰と会つて来たか、秘書官たちの間で互いに問い糾すことはほとんど無い。従つて秘書官はみな孤独だった。言いたい事が一ぱい胸にたまつていても、ただ黙つて耐えていなくてはならない。それが彼等の役目だった。

自分がいま、どんな性質の使命を与えられているかを、彼は正確には知らされて居なかった。まるで子供の使ひのように、行先を教えられ、先方に対して言うべき口上を知らされ、返事を聞いて来いという、ただそれだけの命令であった。

「人目に立つからな。私は行くわけに行かんのだ。タクシーに乗つて行けよ。帰りは別の車を拾つて来るんだ。解つてゐるな……」と官房長官はよく光る眼をきらきらさせながら、低い声で言つた。

どういふ事が起つてゐるのか。長官は何をしやうとしてゐるのか。西尾は知らない。知らないけれども、おぼろげには解つてゐた。官房長官は極秘のうちに、或種の金策をしなければならぬ。恐らくは龐大な金額であるらしい。個人的な金策ではない。政治的な必要に迫られてゐるのだ。しかし政治的に必要な金額は、国家予算の審議を経て、いくらでも使える筈ではないだらうか。して見ればこの金策は国家予算とは別個のもの、極秘に動かされるかねであるらしい。人民には知られたくない或種の不正が行なわれていることは、ほぼ確実だった。不正はあの迷宮のよゝうな建物、首相官邸の中で行なわれたに違ひない。その不正の辻褄をあわせるために、長官はいま巨大な金策をしなくてはならなくなつたのだ。一分の隙もないほどに身だしなみの良い紳士、いつも縞の服を着て、ネクタイピンにダイヤを入れてゐる洒落者、中年の美貌を自負してゐる伊達男。そして稀代の切れ者と評されてゐる星野官房長官は、西尾の眼からは深い霧に包まれてゐるよゝうな、正体のよく解らない人物であつた。従つて西尾秘書官は遠隔操縦の仕掛けによつて自分が操られてゐるよゝうな氣持だった。彼自身の意志はどこにもない。彼とは何の關係もない事件なのだ。しかし彼がその不正な事件の（片棒をかつぐ）結果にならうとしてゐた。秘書官という地位に在る限りは、拒むことの出来ない使命であつた。

実はいままでにも、是に類する使命を与えられたことは少なくなかつた。いわゆる政治献金という名前の、或種の利権のからだんだ金額をひそかに受け取るために、実業界のいろいろな人たちと、いろいろな場所で會つたことがある。その時も西尾はただ子供の使ひのよゝうに、受け取るものを受け取つて歸つて来たばかりであつた。多勢いる秘書官の中でも格の低い西尾は、格が低いからこそ人目に立たないという利点があつたのだ。役所の車ではなく、タクシーに乗つて行けと言われたのもそのためだった。歸りにはまた別の車を拾つて歸るのだ。それは（犯跡をくらます）行為だった。しかし西尾自身には罪をおかす意志もなく、それによつて受ける利益もなかつた。現在の政府の中でも、総理に次ぐほどに華やかな立場にある星野官房長官の、その手先に使われ、意志を奪われたロボットのよゝうな立場で、彼は官邸から外に出た。晴れた日の五月の空が、このロボットには少しばかりまぶしくて、却つて氣持が暗くなるよゝうだった。

車はゆるやかな坂道を降つてゐた。夏ちかい暑い日であつたが、西尾は蝶ネクタイをきちんと結び、黒い服を着てゐた。それが秘書官という職業の制服のよゝうなものであつた。彼の勤めはいつも何かしら重苦しいもの、息の詰るよゝうなものであつた。政治、人民、社会、法律、世論、議會、野党、財政、國際問題。……そういう風に、相手が

つも巨大であつた。彼が接触する人たちは、大臣、次官、財界人、代議士、局長、総裁という風な、一種の圧力をもつた人たちばかりだつた。その間にあつて、何の地位もなく威力ももたない下級の秘書官は、只の走り使い、連絡係りのようなものであつた。自分の意志や自分の意見などは持つことを許されない立場だつた。従つて気持はいつも緊張しているが、緊張したままで鬱屈し、それが内攻して、いつの間にか自家中毒のような症状をおこし、彼の精神までも損ねて来るのではないかという気がしていた。

官房長官から指定された建物を探すのに、すこしひまがかつた。訪ねる相手は非常に有名な男だつた。むしろ悪名の高い男、新聞や雑誌では怪人物と言われる男。そして前科四犯だつた。

探し当てた新成ビルは、地上八階の大きな建物だつた。石原事務所はその七階と八階とを使っている。しかし看板も何も出ていなかった。僅かに玄關の壁に名札が出ているばかりだつた。地上二十メートルというその場所は、まるでこの大都会の盲点のように、一般の人には全く気の付かないかくれ場所だつた。誰の眼にも見えるこの高い空間こそ、却つて誰にも近づくことの出来ない、誰にもその内部をうかがい知ることの出来ない、秘密の城廓であつた。一つの階段と一つのエレヴェーターとだけが、この秘密の城廓と外部の世界とをつなぐ細いルートであつた。

八階まで上つて、西尾秘書官は案内を求めた。そして直ぐに応接室に通された。何の装飾もない小部屋に、まことに事務的な家具が置いてあるばかりだつた。この事務所のあるじには、客を歓迎しようという気持は無さそうに見えた。

扉をあけて出て来た人は、六十歳前後とも七十歳ぐらいとも、見分けのつかない、頭を丸刈りにした背丈の低い男だつた。田舎町の町役場に三、四十年も勤めている平凡で実直な男……とでもいうような、氣の利かない風態をしてゐた。上着を脱いで、半袖の白いシャツ一枚であつたが、初対面の西尾を見た時の、腹の底までも見透かすような眼光の鋭さは、只ものではなかつた。西尾が立つて型通りの挨拶をするのに、受け答えをしようともせず、唇を半分ひらいただらしない表情で、椅子に坐つた。

「星野さんから電話はあつたがね……」と彼は横柄な口調で言つた。「用事は何も言わなかつたが、どういふお話かね」

彼の声は低くて鉛のように重く、鉛のように灰色に濁つてゐた。西尾はこれまでの三十五年の生涯で、はじめてこんな男を見たような気がした。重く、鈍く、濁つていて、底が見えない。相手の顔を見ていながら、その人柄というものが見当がつかなかつた。顔つきは田舎おやじのようであるが、最初の短い彼の言葉の印象はひどく鋭利だつた。

いつも西尾が接している大臣や代議士や高級官吏たちは、組織の力や団体の力に支えられ、その力に頼って威張っているが、そういう人たちには共通な甘さ、他力で支えられて良い気になっている甘さ、というようなものがある。しかしこの石原参吉という男には、そうした甘さは微塵もなかった。独りきりの力で百五十億とか二百億とか噂される程の富を築き、前科四犯という国法の圧力をも掻い潜って、堂々とここに事務所を構えている男の図太さと自信の深さとが、眼に見えない力になって西尾の前に迫ってくるようであった。

「では、用件だけ申します」と秘書官は固くなって言った。「星野官房長官からの、極秘の御相談ですから、どうかほかの人には一切洩らさないで頂きたい、ということです。それから、私はただ石原さんの内意だけを伺って来いと言われた訳でして、正式には官房長官が直接に御相談を申したいということでした」

「ふむ。それで？」

「用件は金融のことです。官房長官は石原さんから、大至急にかねを用立てて頂きたいということです。金額は二億円で、全部現金でお願いしたい。返済期限は一年ということでした」

「ふむ。……利息は？」

「それは石原さんの御意嚮を聞いて来いということでは

た」

「担保は？」

「ございません」

石原はしばらく黙っていたが、

「国有地を担保にすることは出来ないかね」と言った。

「それは私には解りません」

「どうも、話にならない。私はそんな危い仕事は嫌いだからね」

「国有地の担保があれば貸していただけますか」

「いや、やめよう。折角だが星野さんに断って下さい。政治家はね、現役の時には何でもやれるが、一度政変が来て現役をはなれたら、もう駄目だからね。私は政治家のおつきあいはきらいなんだ」

彼は立ちあがった。帰ってくれという素振りだった。官房長官などは物の数とも思っていないような、図太い態度だった。彼が政治家を嫌いだというのは、理由のあることだった。彼は前科四犯である。政治家というよりは政治機構そのものが、彼にとっては加害者のように見えていたに違いないのだ。西尾秘書官を応接室に残したまま、彼は部屋を出て行った。出て行く彼のうしろ姿は、押しても突いても動かないような一種の重量感をもっていた。法律に楯ついて生きて来た男の、不死身のような重量感であった。

善良な市民には何かしら一種の薄弱さがある。石原参吉の図太さは犯罪をくり返して来た男の、怕いものを知らないようなふてぶてしさでもあった。

エレヴェーターを降りて外の街に出たとき、西尾はびつしりと汗をかいていた。喧嘩に負けた犬が尾を巻いて逃げて行く時のような、みじめな気持を彼は味わっていた。彼は人間の怕さをよく知っていた。彼が毎日接触している政治家たち、高級官僚たちは、みな一種の怪物だった。しかし石原参吉という男はそれに数倍する怪物であるように思われた。

長官に言われた通りに、彼は街のタクシーを呼び止めて、乗った。車が走り出してから、ふと彼は気がかりになる事を思い出した。石原のところへ、西尾は自分の名刺を置いて来たのだ。石原の手もとに、後日の証拠になるような物を残して来ては、いけなかったのではないか、と思った。相手は何をやり出すか解らないような、厚顔無恥な男だった。あの名刺一枚を楯に取って、官房長官を脅迫することだって、彼ならばやり兼ねない。西尾は官邸に帰りつくまで、その事が気がかりでならなかった。彼はそういう、気の小さい、正直な男だった。

西尾秘書官を帰したあと、石原参吉は自分の事務室のソファに坐って、だらしなく口をあけたまま、呆んやりと床

を見つめていた。彼の顔の表情がだらしなくなっている時は、彼の頭の中が忙しく廻転している時だった。怪人物と言われた男の、怪奇な思考が凝らされている時だった。星野官房長官に二億の現金の（闇金融）をしてやって、危い橋を渡っても、得るものは少々の利息に過ぎない。そんな利息など、参吉はどうでもよかった。それよりも、なぜ官房長官は緊急に二億のかねを必要とするのか。なぜ銀行その他の正規の金融ルートを用いないで、世間では札つきと言われている石原参吉に、ひそかに金融を相談するのか。……この新しいクイズを解明して行く事の方が、参吉にとってはずっと興味があつた。これはまだ誰も知らない事だ。極秘のことだ。極秘と聞くと、参吉はまるで餌にとびつく魚のように、どうしても飛びついて行かなくては済まない性質だった。その性格が、四つの前科を重ねるに至った彼の（業）のようなものであつた。

二億という巨額の現金を必要とするのは、官房長官個人である筈がない。極秘の金融には犯罪のにおいが付きまとう。石原参吉は直感的に知っていた。或種の不正が行なわれたに違いない。場所は言うまでもなく、あの迷宮のような建物、首相官邸の中だろう。政府の大官や政党の幹部連中が、何人かは共犯者であるに違いない。……

そういう事件は石原参吉にとって、珍しい事ではなかった。彼はあらゆる事件の（裏）を探し廻る男だった。表面

に現われたものは何一つ信じない。そして裏面だけを信じるのだ。彼は社会の裏側で生きて居る男だった。鉛のように重い声、鉛のように重く濁った彼の表情は、そういう参吉の性格から造り出されたものだった。彼の事務室の両側の壁は天井まで届くガラス戸棚になっていて、新聞雑誌の切り抜きを集めた何百冊というファイルがぎっしりと詰っていた。それが参吉の調査資料であり、社会の裏の、また裏まで探り出すための、貴重な文献であった。どれもこれも、洗い立てて行けば不正のにおいがする。どれもこれも、現代の社会の病患を内にひそめた、(日本のカルテ)のようなものであった。ちょうど腕の良い医者が、何百人という患者たちを扱って、彼等の秘密の病状を記入したカルテを持っているように、石原参吉は日本の社会の上層部、政治の上層部の人たちの、ありとあらゆる行状を記録した何百冊という黒いファイルをかかえているのだった。そして医者が患者から収益を得ているように、この黒いファイルが参吉の極秘の収入源でもあった。

彼はインタフォーンで女秘書を呼び出し、「荒井君と脇田君を呼んでくれ」と言った。

まもなく二人がそろってはいって来た。荒井は中年の瘦せた小男で、脇田は三十過ぎの元氣そうな青年だった。「お前たち二人でな……」と参吉は言った。「ひとつ調べてもらいたい仕事があるんだ。二人で連絡をとりながらや

ってくれ。相手はな、星野康雄。内閣官房長官だ。大変な敏腕家という話だが、あの男のやる事を細大漏らさず、徹底的に調べてくれ。何日に、どこへ行つて、誰と会ったか。何をしゃべったか。何を食べたか。……どんな事でもいい。全部しらべてくれ。どんな車に乗ったか。どんな洋服を着ていたか。……わかったな。費用はいくらかかってもいい。そして三日目ごとに報告書をこしらえて俺に報告しろ。形式なんかどうでもいいからな」

「調査の目的は何ですか」と若い脇田の方が言った。

「調べてみないと解らん。調べていけば必ず何か出て来る。それを探しているんだ。今から直ぐ取りかかってくれ。ほかの仕事はあと廻しでいい。それから、いい加減な名刺をこしらえて置け。何とか新聞政治部記者とか、週刊雑誌の記者とか、とにかく怪しまれないような名刺を持っているんだ。おれの名前は絶対に出してはいけない」

二人は部屋を出ていった。三日たてば最初の報告が来るだろう。調査の本当の目的は、自分の事務所の所員にさえも秘密にしていた。参吉のたった一人の頭の中だけで、奇怪な計画が組み立てられているのだった。星野は多分、二億のかねの調達で四苦八苦するに違いない。本当はもっと巨額の金策をしているのかも知れなかった。五億とか、七億とか。……それを石原参吉はひそかに見抜いていた。

彼はさっき女秘書が持って来た名刺を、一つのファイル

の頁に貼りつけた。(内閣秘書官、西尾貞一郎)と印刷してある。その横に彼は書き付けるのだった。(五月二十六日午前十一時。星野官房長官の使者。金融要請。二億。拒絕……)

この名刺がどんな風に役に立つか。そこまでの計算は無かった。ただ彼はあらゆる調査資料をこの事務室にそろえて置かなくては気のすまない、一種の拾集癖をもっているだけだった。

諜報網

十一時すぎに彼は電話をかけた。交換台を通さない、彼ひとりの専用電話だった。これは電話帳にも番号が出ていない、外部の者には知られていない電話であった。相手は女の声だった。

「ああ、おれだ。十二時にそっちへ行くからな」と参吉は言った。

女は軽い口調で、(はいはい)とだけ答えた。話がそれだけで終ったのは、二人の関係が古いものである証拠だった。

た。

石原参吉は六十を幾つも過ぎた今日まで、ずっと独身だった。それには幾つかの理由があった。(女はどこにでも居る。どこにでも居るものは、どこでも楽しめばいいのだ。……)そういう不道德な理窟は他人には通じないが、彼は自分ひとりの理窟を信じていた。子供は四人いたが、みな別々の女の子供だった。それらの女の一人をも、参吉は正妻にはしなかった。ひとりの女に自分を固定させる事を嫌っていた。女を妻という立場に置けば、男は彼女に対して、自分を説明したり弁解したりしなくてはならない。たくさん秘密を持つている参吉は、女との関係を、(いつでも別れられる)ような形に限定していた。女には惜しみなくかねを与える代りに、彼自身は最大限のわがままと自由とを確保していた。

彼の生業は、証券投資であり貸ビル業であり金融業であった。彼の調査室はそのためのあらゆる調査に当たっていた。不当な高利を取る闇金融は処罰を受ける。しかし石原参吉は自分の闇金融を(人助け)だと信じていた。正当な手順では金融の出来ない人、それが無くては自分の地位や事業に破綻を来すような人を、闇金融によって助けてやるのだと思っていた。高利を承知の上で参吉から極秘の金融を受ける人たちには、犯罪のにおいがつきまっていた。賄賂、買収、不正支出の穴埋め、等々。その金融が犯罪を

成立させることもあるが、犯罪が世間に暴露することを未然に防止する役割りをも果たしている筈だった。

十二時すこし前に、彼は八階の事務室を出て、七階の事務室のなかをひと廻りした。ここは彼の財産を管理運営している事務所だった。それから階下に降りて、流しのタクシーを止めた。事務所には専用の車が四台あったが、人眼につくことを避けて街の車をひろったのだった。誰も彼を尾行している者はいない。彼の行動を監視している者もない。しかし彼は常時、自分の行動を秘して、どこにも証拠を残さないように心を配っていた。それは一種の精神病、（強迫観念）のようでもあったし、追われている犯罪者のようでもあった。

赤坂山王の大通りから少し横にはいった所で車を降りると、参吉はずんぐりした肩を振るような歩き方で、七十メートルばかりも歩いた。いきなり女の家の玄関に車を乗りつけるような不用意なことは、決してしない男だった。

港区赤坂という街は、戦後になって急速に変貌した。戦災を受けてほとんど焼け野原になった所が、今は、歓楽の巷に変わっていた。昔から名の通った花柳界も立派に生き返った。戦前よりも一層繁栄しているようであった。しかし正午の赤坂は昨夜の宿酔がまだ残っているような、だらけてごたごたした街だった。板塀をめぐらした大きな料亭はひっそりとして夜を待っているようだった。昼と夜と、全

く違う二つの顔を持った街だった。夜は、人間の持っている本質的な悪さが、ふつふつとして煮えあがって来るような場所だった。権謀術数、物慾、色慾、ありとあらゆる慾と闘いながら、酒と絃歌とのあいだで取引きされるような街だった。

横丁の、もう一つ横丁のような露路をはいったところで、参吉は洒落た細い格子をあけた。一週間に一度は必ず訪ねて来る家だった。

魚を焼く匂いがしていた。参吉のために昼食の支度をしているのだ。女あるじは萩乃という四十ちかいような芸者だった。小肥りのきれいな女だったが、花柳界の不健康な空氣が、化粧のない顔にうす黒い疲労の色を見せていた。参吉が案内も求めずに黙って上って行くと、萩乃は彼を迎えて、

「暑いわね」と言った。

彼は答えずに上着をぬいだ。不愛想な男だった。奥の八畳の間に坐ると、萩乃はすぐに扇風機の風を向け、冷蔵庫から冷たくひやした手拭を持って来た。その間に中年の女中が冷たい飲みものを持って来た。何もかも手順がきまっていた。何年かの間に、いつの間にかそういう順序が出来てしまったのだった。

萩乃は顔立ちは美しいが、色の黒い女だった。三十八になって肥って来た。昼間は洋服を着ているので、部屋の中